結草
kusamusubi
No.42

Publishing house:2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyuJhokoji Phone&Fax 076-252-4922
www.jhokoji.net info@jhokoji.net 2024.12.01

人と生まれた意味をたずねていこう

順教寺住職　細川　公英

皆様おはようございます。今年も浄光寺様の追弔会にご縁を頂戴致しました、細川と申します。今からお時間を暫く頂きまして皆様と共に南無阿弥陀仏の御教えを聴聞させて頂きたいと、このこと一つだけ願って出て参りました。何卒宜しくお願い申し上げます。

本日一同にこうして集まって皆様にお会いできまして南無阿弥陀仏の御教えを聞かせて頂く、そういうご縁をいただいたということは本当に有難い。私達が人として生きていく方向とその意欲、そして責任を本日再確認させて頂ければと思います。

父の死

今年に入って、二月に私の父が亡くなりました。これまでもご門徒様のご葬儀、あるいは仕事関係、ご近所のお付き合いの中でお参りさせて頂くことは何回もありましたが、やっぱり他人事だった。何が他人事だったかというと、死ということ。死という問題ですね。仏教では生死と申します。死の問題だけではなくて生死、生と死、これを引っ付けて一つのこととして頂き直すのですね。亡き方からこの生死の問題を一人一人が問われている訳でしょう。ですから今日も追弔会ということでございますから、皆様方におかれましても大事な方が先にお浄土にお帰りになられた、そういう方が身近にいらっしゃったはずでございます。そういう悲しいご縁でありますけれど、亡き方は私達に大事な縁を与えて下さった。問いかけて下さっているわけでございましょう。一体生きるとはどういうことか。そして死ぬということはどういうことか。生死の命を私達は今ここに平等に仏様から頂いている。その命をどう頂いているのか、そういうことが亡き方から我が身自身に問われているということであった訳ですが、今までの私は、色々な様々な仏縁にあいながらも我が身の問題になっていなかったということです。僧侶として、仕事として割り切っていた。せっかくの仏縁が自分には関係ない、自分はお参りしているだけだとそういう立場でいればそれは我が身の問題には全くなってこないのでありましょう。私自身の姿勢というか、生き様というのがお恥ずかしいことであったなと父の死が教えてくれた。父の遺体を前にして改めて思ったことでございます。

振り返ってみれば、ちょうど去年の7月下旬でありました。急に父の容態が悪くなりましてね、これはいかんということですぐ救急車を自宅の方に呼びました。そしてかかりつけのお医者さんに入院ということになりました。そして暫くたって食事が摂れなくなった。つくづく今回思いました、当たり前だと思っていました、食べられ

ることが。三度の食事を頂くのが。逆に文句は山ほど言う訳です。食事が遅いだの冷めているだの、文句だけは言うのだけど、頂くこと自体の感謝、感動というのをすっかり忘れている。当たり前に感じていましたね。しかし父が食べられなくなった。口にまず食べ物を入れて噛まなければならない。噛むのにもやはりちゃんとその筋肉がないと駄目ですし、今度は噛んだものを食道に通して胃に送る、これも筋肉の働きですね。筋肉の働きが万全であるからちゃんと送ることが出来て、今度は消化する。胃の働きですね。そして腸の方に送る。そういう身体の機能が我々は全く分からない訳です。当たり前だと思っていた。色んな機能が低下して食事一つ摂れなくなる。そうすると今の医学ではどうするか。点滴ということになります。点滴によって栄養分を身体に摂取する。点滴がない昔ならそのまま命終を迎えていたのでしょう。

しばらく点滴をしていまして、ある時、主治医の先生からこう言われました。「細川さん、今後の治療について三つの選択肢があるので来週までに一つ選んで欲しい」と。一番目は現在の点滴をこのまま続ける。しかしこれはどうしても先が短い。二番目として、今の点滴ではなくて血管の静脈の方に点滴を通してより栄養化の高いものを身体に取り入れる、そういうやり方。そして三番目はいわゆる胃ろうです。直接胃に管を通して栄養を摂取する。栄養分が高くなりますから当然命も長くなる。その中の一つを選んで欲しいということでした。母や、弟も二人いますので話し合いながら、インターネットの情報なども色々調べましたが、やはり一つを選ぶ決断というのは難しくて時間も迫ってくるわけです。ただ生前父は、いわゆる延命治療はしないでほしいということは言っておりました。

では点滴のどの辺が延命治療になるのか、今度は線引きですね。点滴自体が延命治療になるのか、点滴を外せば父の意向通り、延命治療をしないでほしいということになるのか。でも点滴を外すとなると、情があります、家族として。やはり一日でも元気でいて欲しいという情がありますから点滴を外してということも出来ない。かといって、胃ろうということになると父の思いからするとどうなのかということもございまして、色々相談した挙句、二番目の治療を先生にお願いしました。

その治療は続きましたが、やはり段々弱っていきますね。昨年はコロナ禍でしたから私達家族は見舞いに行っても病室まで行けない。別室に通されましてタブレットの画面を見て下さいと。そうすると父の顔が画面に映る。いわゆるテレビ電話のような感じです。父の病室にも同じタブレットがあって、父も私達の顔をタブレットを通して見ることができるわけであります。そして音声もお互い聞こえます。ですから画面をみて「お父さん元気か？今来たよ。」とこういう会話をしますが、時間制限が十分ほどでしたからあっという間に終わります。だから母親は病室まで行ってお父さんの横で色んな話をしたかったと残念がっておりました。コロナ禍ということで日本だけではなく世界中で、お見舞いをするときはこういうご苦労をされていたのだなと、感じたわけです。

そして年明けて、先生からはいよいよということでありますから、心の中に留めておいて欲しいと。二月の上旬、私の携帯の番号に病院から着信がありまして、これはいよいよだなと駆け付けましたけれど、その時はもう息を引き取っておりました。皮肉にもその時初めて父の病室に入りました。母と身内でね。あぁ父はずっと半年間程この病室にいてこの天井を見上げていたのだな、何を思って毎日過ごしていたのかな、そういう

ことも思いながら手を触ったり身体を触ったりしていました。まだ温かったです。温もりが残っているのであります。

そこで私は初めて父の遺体と真向かいになった時、父が私に問うてきた。お前にも必ずこの時が来る、これがまず一点。お前にも必ずこの時が来るのである。その事を承知して生きているのか。もっと言えば、今生きているということに本当に感動を持って生きているのか。ただ

ダラダラと一日が経って、そういう生き方に終わってないか。そういう問いかけが父の人生を通して私に問われたと感じたわけであります。正にその通りでありますね、一日一日、何の感動もなくただ過ぎていく。それが私の人生、歩みです。今日もまた朝、目が覚めて、覚めた時も何の感動もないわけです。あぁ、また朝か、今日はあれして、これしてとスケジュールをこなしていってバタバタと一日が終わる。その繰り返しで一年が終わってお正月を迎える。また一つ歳をとったな、その繰り返しです。そして気づいてみれば私も今年五十八歳。早いですね。ついこの前まで二十歳やったなという感覚です。この前まで学生やったなあと。待ったなしです。あっという間に人生過ぎていくとそういうことを父の遺体を前に訴えかけられていたのではないかと思いました。

そしてもう一つは、人として生まれたということは一体どういうことか。根源的な問題です。その事をどうぞこれからの人生の歩みにおいてあなたの課題としてお念仏の教えを聞いて欲しい。お前はお寺におって僧侶だろう、真宗のお念仏の教えを頂いている身だろう、本当に教えを聞いているのかと。私はそういうところが傲慢な態度、姿勢でした。衣を着ているから私は分かっている、ちゃんと教えに生きている、そういう自負心はありました。そして人に教えを説いてあげんなん。なんとこれは傲慢な態度であったでしょうか。私自身は本当に南無阿弥陀仏の教えに真向かいになっているのか。そのことを父は改めて私に厳しく問いかけてくれているのだと今回思ったわけであります。

生まれたことの意味

今年そういう父との別れということがありまして、それから三月、四月には宗祖親鸞聖人のご誕生八百五十年、立教開宗八百年という慶讃法要のお参りが京都の東本願寺で行われました。皆さんの中にもご縁があってお参りなさった方もおいでるかと思いますが、私も日帰りでしたけれど行って来ました。本願寺からテーマが掲げられていました。「南無阿弥陀仏　人と生まれたことの意味をたずねていこう」こういうテーマです。親鸞聖人がお生まれになって八百五十年という長い長い年月が経った今日、私達も生まれた、しかも人として。その生まれたという意味を南無阿弥陀仏の教えに聞き、たずねていこう。正に私がずっと曖昧にしていた問題です。自分が生まれた意味、こんな難しいこと考えなくてもいいよと思う自分がいるわけです。毎日生きていければそれでいいよと、敢えて考えなくてもね。そういうことを友達に聞いても、煙たがられるだけだと、仲の良い友達ともなかなかこう

いうことを話すことも出来ないでしょう。そんなこと言ったら白ける。色々な話で盛り上がっている時に、ところで人と生まれた意味をたずねんかと言ったら、お前何を言っているんだ、お前はどうかしていると、そうなると何となくわかるので自分から聞くことはないですね。しかしですね、私達はそういうことをたずねていきたいという思いがやっぱり流れているのでしょう。本当の自分に出あいたい。人生とは一体何ぞや。この流れていく一日、一年、そして必ず終わりがくるということであれば、一体今生きているという意味は何であるか、そのことを明らかにしたい、問うていきたいというのは誰にもある。しかし我々にはこういう心があるということは全然分からないわけです。でも人として生まれたからには必ず問いたい、教えに聞いていきたいという心があると仏様はそう見て下さっている。

私がいつも本願寺にお参りさせて頂く時、その時の自分の生活の課題というものを確認するわけです。京都に着くまでの二時間ちょっとの間に、今、自分が生活の中で何が問題になっているのか振り返る。今年は父が亡くなったことが大きなことだからそれを抱えて本願寺さんにお参りした。そして御影堂という親鸞聖人の御真影がある大きな本堂に入って、畳に座って静かにまず「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…」とお念仏申します。そして正面の親鸞聖人の御真影とお話、対話するわけです。口には出さないですよ、心の中でね。「今年私の父が亡くなりました。今まで私は生きているということに問題を持ってなかったけれど、改めて自分が両親から命を頂いて、今生きているということは一体どういうことなのか少し課題になり始めました。」そういうことを親鸞聖人に申し上げる。そして親鸞聖人なら私に何と語り掛けて下さるかなとイマジネーションするわけです。まさか親鸞聖人の声を聞いたとかそういうことは申しませんが、もし今親鸞聖人がここにおいでで、私の悩み、課題をお尋ねしたら、おそらく「ようこそ本願寺にお参りにおいでたな、お前の今の課題はそういうことか」と、まず親鸞聖人はしっかりその問いをちゃんと受け止めて下さって、そして最後にこうおっしゃるに違いない。具体的な対処療法はおっしゃらない。最後にこの一言だけおっしゃるでしょう。「お前は南無阿弥陀仏を申しておるのか。お念仏申しておるのか。お念仏の教えに生きているのか。そのことをもう一度お前の胸に確かめてみなさい」、そういうことを親鸞聖人から言われたような気がしました。もちろん親鸞聖人は昔の方ですけれど、今現在もそういう意味では生きていらっしゃるのでしょう。教えとなってお念仏の声となって。

次に六月にも本山に行く用がありました。今度は二泊三日の研修で泊まり込みでした。ご門徒様十二人と過ごしてきました。寝食共にして三日間過ごすわけです。清掃する時間もあります。私達の班はどこを掃除したかというと、親鸞聖人の御影堂です。その本堂の畳を乾拭きするという役割を与えられました。その時に思いました。今まで何人の人がこの畳に座って南無阿弥陀仏と念仏申してお参りしてきたのかなと。そういうことをちょっと考えてみたんですね。今までたくさんの方々が、日本中、世界中から、若い方からご高齢の方まで、人間関係などそれぞれに様々な問題を抱えてここに座ってきた。もっと言えばどう生きて行けばいいのかわからないという方もたくさんいらっしゃったでしょう。本当に絶望の中でお参りされた方もいたでしょう。色んな方々がこの畳に座ってお念仏申してきたのだと。

そういうことを思っていたら

一人の方から声を掛けられた。「私、今やっと本願寺に着きました。秋田県から参りました。」そうおっしゃいました。「実は私の大事な一番の親友が亡くなりました。」その友人の方は日ごろから本願寺にお参りに来ていた。一回でいいから本願寺にお参りに行って来いとよく言われていたというのです。そしてその友人が亡くなった時に改めてその友人の言葉が蘇ったわけです。それで思い立って奥さんとはるばる秋田からやってきたと。今友人がお前も行ってこいと言っていた理由が分かった気がすると。友人もこの畳に座って南無阿弥陀仏とお念仏申しておったのだな。どういう思いで手を合わせていたのかそれはわかないけれど、彼なりに色んな問題があったに違いない。そのことを親鸞聖人にやはりご報告しに来たのではないか。そして生きる勇気と力と希望、そういうものを親鸞聖人に頂いて地元に戻って行ったのではないかと、そういう気がするということをおっしゃるんです。何とも言えない表情でお話してくださいました。私もうれしい気持ちになりました。ですからお寺、本願寺、あるいはこの浄光寺さんの本堂もそうですけれど、本堂というのは様々な方々が生活においての苦悩や悲しみを背負いながら一同にお参りする、そういう場である。それぞれ悲しみも苦悩も違うかもしれないけれど、しかしそれぞれにご苦労を背負いながら、人生に問題を抱えながら課題をもちながらお参りする場所がお寺の本堂であるなと改めて思いました。

　そういうことを思うと私にも確かにそうだなぁと思うことがあります。私の自坊では毎月同朋会というのがあってお参りの会を勤めています。毎回来て頂いている方が、ある時こういうことを言って下さいました。「私はこうやってずっと聴聞させて頂いていますけれど、なかなかそのお念仏の話が分からん。分かったとしても外に出ると、家に帰ると忘れてしまう。その時は分かっていても外に出ると分からなくなってしまう」と。その後に言ったことが大事。「でもね、分からないから、忘れるから、ますますお念仏のいわれを聞かずにおれないのです。」そういうことを九十歳のおばあちゃんが私に言って下さいました。私は何度このお言葉に励まされたことか。分からないことは分からないでほっておくのが私の態度だったけれど、分からないからこそ、次また聞かせてもらう。南無阿弥陀仏の教えを聞かせて頂く。そういう先達がいらっしゃる。その方はお浄土に行かれましたけれど、その方の表情と声と教えは私の脳裏に残っています。そういう出あいを有難く思っています。私達に先立ってお念仏の教えに生きた方に出あう、これがお寺の本堂での出あいであります。ですから今日も皆様は色々なご苦労を身に背負いながら本日こうやってお参りのご縁があって私達は出あわせて頂いているのだなと改めて思います。　そしてそういう方と出あうと自分の悩み、思いはちっぽけだな、自分だけのものではなかったな、と気がつきます。おかしいことに自分だけがしんどいと思い込んでいるのです。自分の思いに閉じこもってしまうのです。自分だけしんどい、あの人楽だな、よそ様を見ていたら楽に見えるでしょう？不思議ですよね。自分だけが一番世の中でしんどいものを背負っているような気になるのです。

一人の悩みではない

　今、ＮＨＫの大河ドラマで「どうする家康」がやっていますよね。去年は「鎌倉殿の十三人」が放映されました。鎌倉時代、初代は源頼朝。役者さんは大泉洋さん。源頼朝の長男の頼家。そして次男の実朝。鎌倉時代の

北条家のドラマでした。九月四日の第三十五回。その時は三代将軍実朝のことをやっていました。実朝さんというのはどちらかというと政治的な権力者タイプではなくて、歌を詠まれる方です。百人一首にもあります。和歌集も出しています。ですから悩んでいました。苦悩されていたに違いないです。この私が日本の幕府のトップとして率いていかなければならないことにプレッシャーを感じている。しかもあの時代ですからいつ自分が殺されるかもしれないという不安感の中で生きている。実朝のお兄さんは二代将軍頼家。頼家は伊豆修禅寺で殺されてしまいます。兄の頼家が殺されたことによって幼少の自分が三代目を継ぐことになった。そういうことを経験しているからいつ自分がそういう目にあうのかという恐怖。私達の想像を絶しますよね。

そしてある時、側近の人が気分転換に外へ出かけましょうというわけです。そして連れて行かれた所が何ともいえない汚い小屋だった。中に入ると占い師の老婆がいた。その占い師は目の前の人が将軍様だと知らずに、表情を見てこう言った。この言葉が私は非常に心に響きました。その実朝の何ともいえない苦悩の表情、生きていることに光を見出すことが出来ないような表情を悟って、「これだけは言っておくよ。お前の悩みはどんなものであってもそれはお前一人の悩みではない。はるか昔から同じことで悩んできた者がいることを忘れるな。この先もお前と同じことを悩む者がいることを忘れるな。悩みとはそういうものだ。お前一人のものではない。決して。」そうしたら実朝の表情が映し出されて、目から涙がこぼれる。その時、何とも言えない豊かな表情をなさった。その時初めて実朝は自分だけが大変、自分だけが苦しんでいるという思いが破られたのでしょう。そういえば私の父もそうだったに違いない。そして大変な最後を迎えた兄も大変なご苦労をしてきたに違いない。さらにはその前の方もその前の方も、強いては鎌倉の町に生きている人々もそれ以外の人々もそれぞれに苦悩を抱えて生きているということに目が開かれていったのでしょう。

そしてその占い師が言ったもう一つのことが素晴らしかった。「この先もお前と同じ悩みを持つものがいることを忘れるな。」まだ生まれていないものもお前とまた同じ悩みを必ず持ちながら生きるのである。そういうことを忘れてはいけない。」正にこれ私達のことではないでしょうか。この先というのは私達も含まれている。鎌倉時代と令和の時代は状況が違って全く比べられないけれど、根本は一緒でしょう。人間が生きているということは。人間関係に苦しみ悩み、老病死に悩み、必ず死がくる。そういう不安を持つ者、人間としては同じである。そういうことを聞かされて実朝の表情は豊かになった。自分だけの悩みではなかった、これこそが人間の悩みであったか。

それぞれの悩みを南無阿弥陀仏の教えに聞いていかれた。そういう歩みが実はお念仏の歴史にあるわけです。だからこの言葉を私は大事にとってあります。私の思い、分別を破るそういう言葉と出あい、私個人の苦悩に人間存在の苦悩の歴史を頂く。具体的には実朝の苦悩は父の苦悩でもあったな、兄の苦悩でもあったな、そういう風に開かれていくわけです。

実朝は因果なもので兄の子供の公暁に鶴岡八幡宮で暗殺されます。どういう思いで最後を迎えたかということも思いますけれど、しかしあの一瞬の実朝の見せた表情、涙というのは忘れられないです。言葉に救われるというのはそういうことだな、真実の言葉、お念仏の教えに生きた方の言葉に出あうというのは大事です。

本願寺の御影堂の渡り廊下にお念仏の教えにいきた方々のお言葉が大きな額に入れられてあります。宗正元先生のお言葉です。「頭で頷くという場合には理解できないと頷けない。身が頷くという場合は理解できなくても響くということです。」頭で頷くということは理解することが大事ですね。学校の勉強でもそうでしょう。自分の頭で理解して、理解できたら分かったとなる。難しかったら分からないという判断を下します。こと仏法に関しては頭で理解して分かる、分からないということではないと。そういうものを超えて身が頷く、全身が頷くということである。あるいは身に響くということである。まさに実朝が占い師の言葉を聞いたとき、頭で理解したのではなく、実朝の全身が頷いたということでしょう。全身に響いたのでしょう。そういうことを人間は経験するのです。言葉に教えられる。言葉に救われる。

中村久子さんの言葉

中村久子さんという方が岐阜の方においでました。明治三十年のお生まれです。そして昭和四十三年、七十二歳でお亡くなりになった。三歳の時に病気を患う。これは突発性脱疽という病気で、両手、両足を切断されました。そういう縁にあって本当にご苦労されました。そういう状況に陥ったらと想像しただけでも生きて行く希望を失って、どうしたらいいのかわからない。それこそ死んでしまいたい、と思うことも当然あると思います。もちろん中村久子さんにも言葉に出来ない苦悩があったに違いありません。ただ、生きる一筋の光を見出されていかれた。それはお母様が非常に熱心にお念仏の教えに生きた方だった。真宗のご門徒だった。日頃から聴聞されていた。自分の娘の久子にも愛情を持って、時には厳しく育てた。久子さんにもお母さんを通して南無阿弥陀仏の教えにご縁があったので色んなお言葉を残されています。

その中の一つが「なにごともおもふがままに ならざるか かえりて人の身のためにこそ」こういうお言葉ですね。中村久子さんは手を使えないから口で筆をくわえて文字を書く。その字がまたびっくりするくらい達筆です。そうやって書をたくさん残されていった。この意味ですが前半は分かります。生活においてなかなか思い通りにならないと。自分が願ったように現実がならない。私はそればっかり思っています。なんでこんな目にあわなくてはならないのか、なぜ自分だけがと。面白くないといっているのが私です。しかし中村久子さんの言うことと私の言うことは全く違いますね。大変な状況の中で、「なにごともおもふがままに ならざるか。」

そして後半、光を見出されてお念仏の教えに生きた叫びがあります。「かえりて人の身のためにこそ」、かえってそのことが私の身の為であったと。思い通りにいかないことがかえって私の身の為だったとおっしゃっている。「ためにこそ」、ここは強調です。こんなことは普通考えられないです。思い通りにいかなかったらはがいしい（悔しい）、何故だ、と愚痴で終わっていくのが普通であります。面白くないと沈んでしまうのが私です。思い通りにならないからはがいしい。人を羨み、人を怨み、自分をいじめていく。こうなったらもうどうにでもなれという思いも起こる。こういう根性の私。中村久子さんは強がりを言ったのか。そうではないですよね。自然とこのお言葉が出てきた。中村久子さんの生き様でしょう。中村久子さんはお母さんを通してお念仏の教えに出あいます。お母様はお念仏の教えに生きた方であった。南無阿弥陀仏申せよ、お念仏申せよ、とお母様が中村久子さんに教えて下さった。お念仏の世界、お浄土の世界が中村久子さんを生

かして下さっていた。この身体一つも自分の思い通りには最初から行くはずもなかったのである。すべて仏様からの頂き物だったのと気づいて、その身のままこの大変な娑婆を生き切られた。そういうことをこのお言葉から気づかされたのであります。

そういえば私達も生活の中で思い通りにならないことがいっぱいありましょう。一喜一憂して、ちょっと思い通りになったら良かったと舞い上がるけれど、それもすぐ終わります。そしてまた色んな問題が毎日の生活に波のように押し寄せてくる。一つの波が去ってまた次の波がやってきて、今度は大きな波もくる。思いもよらない波が横からやってきたりする。しかし生活の様々なご縁には必ず意味があるのです。無駄なものが何一つないということを教えて下さる。ではその意味のあるものは何かというと、私達が気づきもしなかった、気づきようもなかった仏様の世界に生かされているということ。頂いた命である。自分の命ではなく仏様の命を頂いて今ここに命があるのである。そして必ず死が来る。今生きているという本当の有難さ、深さ、広がり、そういうものをもう一度見つめ考えなおして欲しい。頂きなおしてほしい。そういう願いが実は南無阿弥陀仏の願いでありましょう。そう思えば、私達に先立って亡くなった大事な方々の願いも今、一心に受けているのでしょう。何人の方に私達支えられているのでしょうか。私の両親、両親にもまた両親がいる。そのまた両親がいてずっと歴史はさかのぼっていきます。五十人や百人の話ではありません、色んな方々のすべての願いを受けている。今日の私一人に対して頂いた命、仏様の命、その事に気付いて大事に、大事に日々の生活を送って欲しい。そしてこれからも色んなご縁に出あうだろう、思い通りにならないご縁に出あうだろう、まさかということにも出あうだろう。でもその時も忘れずに南無阿弥陀仏申して、南無阿弥陀仏を届けて下さった方々のその願いを思い出して欲しい。そしてどうかこれから生まれてくる方、まだ顔を見ないこれからの方々の為にもお前はしっかりお念仏に生きて欲しい、そういう願いを実は私達はこの身体に頂いているのかなと思います。

最後に森ヒナさんという方のお言葉を紹介して終わりたいと思います。この方も一生聞法なさった在家の方です。「人間に生れさしてもろたしあわせは仏法を聞きわける力を与えて下さったことだ」幸せは何かというと、仏法というのは南無阿弥陀仏の教え、南無阿弥陀仏を称えることです。仏法を聞かせて頂ける、聞き分けるそういう力をこの身に与えて下さったこと。正に人と生まれたことの意味をたずねていこう、南無阿弥陀仏の教えにたずねていこう、共にたずねていこうと、そういうことを私達の先達の方々からこの私は願われている。願われている身である。だからその願いに今度は報いるような生き方をしたいですね。少しでもその先達の方の願いに報いる生き方、それは念仏申す生活です。それは難しいことではなく折に触れて南無阿弥陀仏と手を合わせる、仏様の御姿に手を合わせる、そういう生活をさせて頂きたいと思っています。

《編集後記》

◇本文は令和五年八月十三日、浄光寺「追弔会」の法話録であります。洵（まことに）に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。

＊行事のご案内＊

「除夜の鐘」
大晦日・午後十一時半

「修正会」
元旦・午前零時

除夜の鐘に引き続き修正会が勤まります。鐘を突いた後、本堂にてお参りください。